

原発現地との繋がりに始まる脱原発の輪

～東海村長と交流を続ける友人からのメッセージ～

昨年夏、僕の故郷である茨城県に住む友人から「東海村長が脱原発宣言をした。しかし、原発立地の意思だけで脱原発は実現しない。応援と連帯のメッセージを送ろう」という呼びかけを受け、手紙を送った記事をアクティオに書きました。

それから半年が経ちました。東海村に限らず、原発立地県である茨城で脱原発、原発反対の声を上げることの難しさに悩み葛藤する

たくさんの人たちに出会ってきました。そんな中、東海村の近隣に暮らすエビちゃんが仲間達と村長を訪ね、今も交流を続けているという話を聞き、今回は彼女からの

メッセージを紹介させていただくことにしました。

5月には東京に暮らす友人たちと一緒に東海村を訪ね、村上村長やエビちゃん達と交流する機会を設けるための準備を進めています。これから何ができるかはわかりませんが、脱原発は原発現地との直接の繋がりで生まれる心の交流から始まると実感しています。

2012年1月20日、原発立地市町村の長として日本で初めて廃炉宣言をした東海村村長を皆で囲みたいという念願が叶い、縁が繋がって村上村長に会ってきました。仲間達から「私達に何ができる?」「何をしたら力になれる?」というメッセージを託されて。

面会時間は予定を1時間もオーバーして、1時間半。周辺地域のママ達7名と共に、全国の人達からの沢山の感謝の気持ちとエールを伝えてきました。私達が自己紹介をすると、村長はメモをとりはじめました。名前を覚えてくれたようです。会ってすぐに村長の人に対する誠実な人柄が垣間見られました。

「これはいのちの問題」「福島原発事故の本質を見てほしい、きわめて広範囲な影響を与えるということ」「ひとたび事故が起これば、ふるさとを失う。地図上から消える」という村長の言葉が皆の心に強く響きました。

現在、東海第二原発周辺には10km圏内に25・30万人が住んでいます。村長の仰るようにいのちの問題なのです。周辺の私たちは、第二のフクシマになることを考えずにはいられません。そんな私達に一体何ができるのか?

「お願いしたいのは、各市町村議会に働きかけていくこと」。それが村長からの応えでした。それが廃炉に向けての強力な追い風になる、と。東海第二原発廃炉の決議のために市長や市議会にかけあつてほしい、と。茨城県内の利害関係のない市町村にこそ、もっともつと声をあげてほしい、県外の方へは廃炉の署名をお願いしたい、と。

対談の中で村長は当初、「この地での放射線の影響は極度にパニックになるほどのことではないだろう」という考えでした。今日は廃炉の話をしてきたのだからと、皆黙っていました。伝えようとする前に言葉を失います。もうこれ以上、理解されずに傷つくのは辛い口をつぐむ人が周りにも沢山います。でもあるママが、村長に一生懸命伝え続けたんです。地元での健康被害を。数値ではないのだと。

それを聞いて村長は、話の節々で何度も何度も反芻していました。「たとえそれが放射線の直接の影響でないとしても、心理的なものだとしても、これは被害だ、大事なことだ」と。ママの訴えに耳を傾け、真摯に受け止めてくれたんです。想いが人の心に響くプロセスを目の当たりにしました。

村長は、苦悩や重責の多くを語りませんでした。だからこそ逆に村長にのしかかるさまざまな重圧を感じました。本来は立场上、脱原発など言えないはずですが、どれほどの覚悟だったのでしょうか。崖っぷちで強風に吹かれ必死に耐えている村長のイメージが今でも浮かびます。それは東海村の村民も同じです。

村外の私達にしかできないことがあるんです。村長の思いを受け、自分達が住む市町村の首長、議員に会いに行こうとそれぞれが思いました。自分達で勝手に作り出していたハードルを超えようと思えました。もう自分達がやるしかないんだと。『他でもない』この私が。



子ども好きな村長。面会中も時折、子どもをあやす姿も

【とみた・たかふみ】京都在住。ワークショップファシリテーター。ソニーミュージックでマネージャー、営業などの仕事をすると4年で退社。音楽系専門学校で講師をしながら、環境・平和・お金や時間の仕組みのカラクリに気づき、イベント・上映会・ワークショップなどを積極的に展開。エネルギー、お金、暦などをテーマに、各地で年間200本以上のワークショップを開いている。ブログ：<http://takafumitomita1320.cocolog-nifty.com/blog/>

